

友田先生のこと

廣 川 智 貴

本学で40年以上にわたり教鞭をとられ、本誌の創刊にも尽力された友田孝興先生が、この3月をもって定年を迎えられた。本来なら、先生がこれまでに残された業績を詳細にご紹介するのがこのような機会に書かれる文章の礼儀なのであろうが、それらについては先生ご自身が『ドイツ詩人とその世界』『ドイツ詩想のこみち』という2冊の書物にまとめておられるので、そちらに委ねることにしたい。ここでは先生から教えを受けた者の一人として個人的な思い出を綴ることで、先生に対する謝意を表したい。

私が友田先生にはじめてお目にかかったのは、1993年4月のことであった。他の新生と同じく、これからはじまる大学生活に希望を抱き、緊張しながらも、新学期にありがちなウキウキとした気持ちに満たされて、私ははじめて学ぶドイツ語の授業に出席していた。このように気持ちが浮ついていたのは私だけではなかった。おそらく、それは、教壇にどのような先生があらわれるのかという期待と不安が入り交じった気持ち、がしかし、その心中を誰にも悟られまいとする、最初の授業時によくみられる学生の不安定な精神状態をあらわしたものであっただろう。

授業開始のチャイムから15分ほど経って（定刻から15分遅れて授業を開始するというドイツの大学の伝統を、先生はひょっとすると意識されていたのであろうか）、先生は悠然と教壇にあらわれた。そして、学生の不安な心中を察し

ておられたのか、まず穏やかに微笑まれた。先生の授業に出席した者なら容易に思い描くことができるあの笑顔である。「あ、この先生なら大丈夫だ」と、学生のほとんどが思ったに違いない。やがて、その笑顔に安心してすっかり緊張の糸が切れてしまったのか、教室はにわかになごめきはじめた。その時である。先生は「ドン！」と大きな音をたてて教壇を足で踏み鳴らし、「あなたたちはもう大学生なのだから」と小さな声で、しかし真面目な面持ちでおっしゃった。この風景を、私は今でも鮮明に覚えている。なぜなら、ここに先生のお人柄のみならず、ドイツ文学に対する姿勢が凝縮されているように思われるからである。

先生はたえずやさしさと厳しさのバランスを保たれていたように私には見受けられる。そして、それは講義にもあらわれていた。先生は、レッシング、ゲーテ、シラー、ハイネ、リルケ、ヘッセなどを好んで講義の対象とされた。それぞれの作家への傾倒ぶりは先生の話しぶりからも十分に感じることができた。それは、たとえ当該の作家について何も知らない学生でさえ、たちまちその作家や作品の愛好者になってしまう、そのような性質のものであった。人と作品について講義される先生の口調はきわめて穏やかで、満面の笑みを浮かべておられた。それは作家に対する敬愛のあらわれであっただろう。

先生の講義の特徴のひとつは、たえず現代の問題を意識しつつドイツ文学を講じられることにあった。作家や作品についてはそれほど穏やかに語られるのだが、講義の内容に基づいて現代社会の問題に言及されるやいなや、先生の口調と表情は厳しいものへと急変した。つまり、先生の穏やかさは厳しい批判精神と表裏一体をなすものであった。そして、このような姿勢は先生のお仕事全体を貫くものであったように思われる。

先生は本誌の成長をも時には厳しい、時には暖かなまなざしで眺めてこられた。これまでいただいた学恩に感謝申し上げるとともに、先生の一層のご活躍をお祈りしたい。

(本学専任講師)
2008年4月受理)